

## 性差のない表現

### インクルーシブ・ランゲージ

「インクルーシブ・ランゲージ」(inclusive language, スペイン語ではlenguaje inclusivo, 「包括的言語」の意)という言葉を知っているだろうか？ これは、ジェンダーや障害、人種、民族、年齢、経済的地位などあらゆる要素における多様性を尊重して、特定のグループを排除しないよう配慮した、中立的な表現を指す。英語で「ビジネスマン」(businessman)の代わりに「ビジネス・パーソン」(business person), 「ボーイフレンド」(boyfriend)「ガールフレンド」(girlfriend)の代わりに「パートナー」(partner)を使うのはその一例である。これは英語にかぎったことではなく、スペイン語圏においても近年、性差のない表現をつくり出し、使用する取組みが進んでいる。

### スペイン語における性差のない表現用法

大半のラテンアメリカ諸国の公用語となっているスペイン語は、ブラジルの公用語であるポルトガル語と同様に、多くの名詞が「o」で終わる男性名詞と「a」で終わる女性名詞に分かれる。たとえば「子ども」を表す言葉として、男性名詞のniño(ニーニョ, 「男の子」)と女性名詞のniña(ニーニャ, 「女の子」)があり、「友だち」を表す男性名詞のamigo(アミーゴ, 「男友だち」)と女性名詞のamiga(アミーガ, 「女友だち」)など枚挙にいとまがない。

国籍や職業を表す語も同様で、性別によって分類される。たとえば、スペイン語の「ペルー人」という言葉は男性名詞のperuano(ペルー人男性)と女性名詞のperuana(ペルー人女性)に分かれる。それゆえ「ケイ(人名)はペルー人だ」という場合、日本語ではケイが男性か女性かがわからないが、スペイン語では「Kei es peruano.」または「Kei es peruana.」のどちらかで表されるため、「ペルー人」という単語ひとつでケイの性別情報まで伝わるのである。

このようなスペイン語の特色を機能的だと考える向きもあるが、その一方で、自身の性自認・性表現を「男性」「女性」といった枠組みに当てはめない「ノンバイナリー」や、性自認が出生時に割り当てられた身体的性別と異なる「トランスジェンダー」のなかには、自分自身を「男性」「女性」として表明することに拒否感や困難を感じる人も少なくない。

写真 「すべての人(Todxs)が決める権利をもっている」児童デイケアセンター内の手書きポスター(2023年3月アルゼンチン, 筆者撮影)



この問題を解決するために使われるようになったのが、語尾に「e」「x」「@」を用いた中立的な名詞である。niño(ニーニョ)、niña(ニーニャ)に対してniñe(ニーニエ)またはniñx, niñ@が使われる。「o」(オ)と「a」(ア)の代わりに「e」は母音の「エ」を加えて発音するが、「x」「@」が語尾についた語の発音は定まっていないため、書き言葉で使用されることが多い。

また、niñoとniñaの複数形はそれぞれniños(男の子たち)、niñas(女の子たち)となるが、男女混合の子どもたちを表すにはniñosと男性名詞の複数形が使用される。したがってniñosという場合、全員が男の子なのかそこに女の子が入っているのかが不明であり、女性の存在が不可視化されてしまう。

この性差をなくすための言葉がniñes, niñxs, niñ@sである。しかし、自身の男性・女性としての性自認をniñesという中性の言葉で表現したくないという人もいる。そのため、それぞれの存在を可視化させながら、男性・女性という2分

法に含まれない性自認をもつ人を表せるよう、男性名詞、女性名詞と中立的名詞の複数形をつなげて“niños, niñas y niñes”や“todos, todas y todes”(「皆さん」の意、これまではtodosのみ。yは英語のandと同じ)が使用されることも増えている。

### 性差のない表現をめぐる2つの動き

国連は、性差のない表現を「話し言葉および書き言葉において、性別、ジェンダー、性自認で差別しない、また、ジェンダーのステレオタイプを断ち切るような表現のありかた」(UN Gender-inclusive language)と紹介しており、ラテンアメリカには性差のない表現の使用を推奨している国もある。アルゼンチンでは2020年に、女性・ジェンダー・多様性省が「ジェンダー視点をもったコミュニケーションのための指針」を発表し、行政や教育の場で性差のない表現を使用することを提唱した。メキシコ、コロンビア、ペルー、チリでも性差のない表現の使用に関する指針が出されており、インターネットで閲覧することが可能である。

しかしその一方で、性差のない表現の使用を規制・禁止する動きもみられる。2022年アルゼンチンの首都ブエノスアイレスでは、保育園や小中学校の教員が性差のない表現を使用して教えることや話すことが禁じられた(生徒同士の会話での使用は問題ない)。その理由として、直近の全国学力調査における児童のスペイン語能力の低下が挙げられている。つまり、教育現場における性差のない表現の使用が、児童のスペイン語学習にマイナスの影響を及ぼすという見解である。ウルグアイでも2022年に、同様の規定が定められた。

さらに2024年、アルゼンチンのミレイ(Javier Milei)大統領は、性差のない表現は標準スペイン語にそぐわないと批判し、すべての公文書ならびに行政における使用を禁止した。標準スペイン語というのは、スペイン王立学士院が規定するスペイン語であり、スペインのみならずラテンアメリカ諸国でも幅広く採用されている。スペイン王立学士院は2018年、男性形の総称用法(例:女の子を含んだ子どもの総称として男性名詞複数形niñosを使用する)は歴史的に定着しており、言語学的に女性を排除したものではないと述べた上で、性差のない表現の使用に反対している。

ほかに、性差のない表現の使用を否定する言説として次のようなものがある。ひとつは、もともとの文法に手を入れて人工的に性差のない単語や表現をつくることは「不自然」だという主張である。しかし、すでに存在している言葉遣いや表現も過去のある時点で、または長い年月を経て出来上がったものであり、言葉を使用する人間によってつくられたものである。そのように考えると、文法は不変であるべきだといえるだろうか。

もうひとつは、言葉を変えても意味がないという言説であり、言葉を変えても社会の差別はなくならないという主張である。言葉の差別を訴え、性差のない表現を使用する人々は、社会からジェンダー暴力や性に基づく不平等が、言葉を変えることによってなくなるとはしていない。

しかし、それまで当然（自然）のものとして意識されてこなかった性やジェンダーに基づく差別・不平等が、言葉を変えることによって意識されるようになれば、それは社会を変革する第一歩となる。性差のない表現を創造し、使用することによって「従来声をあげることができなかった、一定のこぼれを無理矢理選択させられてきた人々が、やっと、こぼれの使用それ自体に埋めこまれている抑圧や居心地の悪さをはっきりと表明し、新しい選択肢を提示することができる」(佐野 2015, 110) ののである。

まずは、私たちが普段なにげなく使っている言葉が、インクルーシブ（包括的）かエクスクルーシブ（排他的）かを考えることから始めてみよう。

### 考えてみよう

- ・日本語にも性差のある表現があるだろうか。具体的な言葉をいくつか挙げて、それらを「性差のない表現」に言い換えてみよう。
- ・近年、学校の教育現場などでは男子生徒に対して「～くん」、女子生徒に対して「～ちゃん」を止めて、男女ともに「～さん」づけで呼ぶ取組みが広がっている。「～くん」「～ちゃん」づけの問題点や、この取組みが意図することは何か考えてみよう。

### 【参考文献】

佐野直子 2015. 『社会言語学のみなざし』三元社.

(渡部奈々)

©IDE-JETRO 2026

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際」の下で提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

